

### (三) 試練

#### 試練

門前払いのうえに玄関に施錠されても、私の求道心に少しの動搖もありませんでした。堂前の石段に腰をかけて、一生懸命に般若心経を微音で読み続けました。寒さに負けじと腹に入れ、仏の加護を祈ったのです。

夜中の十一時すぎに玄関の戸があきました。「いつまでそこに座る気か。いい加減にしなさい。カゼをひいたらこまるから二階へ上がって寝なさい。明日、話をする。」と寝室に案内されました。部屋には、もう布団をしいて下さっていました。

朝六時の勤行が終わつた後「親が反対する子を弟子には出来ない。早く帰るがよい。もし帰るのがいやなら、無給で毎日掃除でもするがよい。そのうちにいや気がさしたら親元

へかえれ。よいな。」と説得されました。私は「月給を頂こうなどとは初めから思っていません。ご迷惑でしょうが、この寺で修行させて下さい。」とていいねいにあいさつしました。

## 掃除の教え

掃除は、まず住居の内外、特に便所のような所を清潔にするのがよい。次に身体と心の掃除をせよ。心身を清めることが仏道の修行である。身の表面のよごれは入浴や水行によつて清まるが、行いからくる心身の垢は風呂にはいってもとれない。そのとれない垢を取り除くのが「懺悔」である。朝に十善戒をとなえてみ仏に誓い、夕に反省して自分の迷いの業を懺悔すれば、み仏は救つてくださると諭されました。

居候の私にとって、寺の内外の掃除をさせてもらうだけで有難いことでした。「この掃

除をおして、自分の心身の掃除をさせてもらおう」と心に誓つたのです。

参拝する信者に茶湯を運んだり、下駄をそろえたり、信者の悲しみの話を聞いたり、また励ましたりしながら、仏の教えの本を読み、經典の読誦の練習に全力投球をしました。半年経過しても逃げ帰らぬ私を見た師は、護身法や九字の切り方等を教えてくださいました。そして、岐阜県の山中にある山中不動の行場に、物持ちとして随行を許されたのです。

## 師 僧 の 行 為

名鉄電車で鵜沼まで行き、岐阜行に乗りかえ宇ヶ瀬で下車。そこから細い山道を三キロメートル程歩くのですが、病弱な信者を十名つれての行動ゆえなかなか進みません。そのうち足腰を痛めていた人が地面にすわりこんでしまったのです。体が大きく体力もある師

は、この人を背負い、汗を流しながら行場にたどり着かれました。

山の参籠所は、電気もなく、畳も敷いていない山小屋でした。私達は、ここで一週間修行することになったのです。

使用する水も下からくみ上げねばならぬという、今では想像も出来ないくらい不便な所ですが、山や水は美しく、空気はすみきっていました。

「汗を流しに滝に入ろう」と師は滝に向かわれました。私は生まれてはじめて滝に入り、頭から滝水を受け、その冷たさに読むお経もとぎれとぎれになってしましました。

「滝に入れぬ信者のために、すぐ風呂をわかしてやろう」と自ら桶に水をくんで運ばれている師の姿に、私は大いに教えられました。「和尚様はえらいですね」と感心して言いますと「病人がかわいいからよ。不動明王は頭の上に蓮の花がある。あれは信者を頭の上にのせて極楽浄土に連れていくこう、とお誓いされたお姿だよ。お前も不動様のお心を知るがよい。知つたら実行することだね。」と諭されました。

私は、薪をあつめたり使い走りを喜んで引き受けました。夜は、全員そろって不動堂に

参詣して各自ローソクを獻じて声を和して般若心経を二十一巻ずつ読誦し、病氣平癒を祈願したのです。病氣の人たちも食欲が進み出し、一週間後には誰もが元気が良くなっているように思い、山の修行のすばらしさを知ったのでした。

私は心身の修行に励みが出てきました。無欲で慈悲深い師僧を慕って集まる信者は、日増しに多くなり、毎日堂に満ちていました。入寺一年後には、師の許しを得て、多忙な師の助法を務めるようになりました。しかし、二年過ぎても、正式に弟子と認めて得度式はしてもらえませんでした。いやになつたらいつでも帰つてよい、という自由の立場で見ておられたようです。

父より「他宗派の僧にしたくないから、弟子にしないように頼む」と申し出があり、約束されていたことが後日判明しました。

## 徵用令

二年余りの歳月が過ぎ去り、日本国に戦争は激しさを増しました。兵器の増産のため人手不足となり、自由業の若者に徵用令が発令され、私もこの通知を受けました。「國難を救うために國民一致協力せよ。協力せぬ者は非國民である。命を捧げて戦う兵士に兵器を送らねば、銃後の守りにならぬ」とかりたてられたのです。

この話を姉にきいた両親から、お寺に迷惑をかけぬよう、家から工場へ通勤するように連絡が来ました。私は厚く師にお礼をのべて、寺より実家へ帰りました。

名古屋の軍需工場へ弁当持ちの通勤が始まりました。工場の中は機械油の煙がたちこめ、動力の騒音がひびいています。香をたきながらすわつてお経をよんでいるのと、朝から晩まで立ちづめの生活とは余りにもちがつていました。

足ははれて棒のようになり、手は機械油でどろどろに汚れました。また、火の気のない

工場内は寒く、なれぬ下手な製品に、熟練した先輩から叱られる日々がありました。

三ヶ月もたたぬ間に、頭痛と発熱になやみ、風邪をひいたくらいに思つて、病院で診察を受けたのです。

## 肺浸潤

精密検査の結果「肺浸潤」。はいしんじゅん三ヶ月の安静療養を要す、という診断書がでました。

私はその病名を疑いました。家族に今までこのようない病気の出た者は一人もいません。両親は私の差し出す診断書を見て顔色が変わりました。母は栄養価の高いものを探し求めて、私の食膳に運んでくれました。しかし、足は鉛をつけた如く重く、肩がこりつけ、頭痛がして食欲は減退し、母のまごころこもった食べ物も残すことが多くなりました。

そんな私を見て父は「お前は仏道修行が適しているのかもしれないなあ。家に帰つても

思い通り拝みなさい。離れ座敷を使って、ひとり修行してもよい。」と言つてくれました。

あれほどがんこな父が、真宗以外の信仰を許してくれたことをうれしく思つて、離れ座敷に小さな祭壇を作り、礼拝し始めました。拝めばふしげに心が安まります。病氣養生しながら、知多半島の新四国八十八ヶ所靈場を回り、大師加持水の井戸より靈水を頂いたこともあります。

ある人より、三重県の桑名市聖衆寺に学行兼備の高僧がおられることがありますと、その寺に足を運びました。小高い所にお寺があり、境内も広く立派な寺です。

御住職にお会いして、密教を研修したい旨を伝えますと「二年以上も寺の生活をしながら得度していないことを残念に思う。御両親の許可をえて早く得度するように。」とのお言葉を頂きました。家に帰り、父にこのことを話しますと、父は桑名の御住職に面会して、私の弟子入りをたのんでくれました。

— 三日もあらずで倒す。頭痛る程度でないから、腰車をひつたまつてお湯ひきの日もあればいいが、

# 得度式

昭和十九年二月八日、土仏山聖衆寺の本堂、阿弥陀如来の御宝前にて父母たち合いのもと、御山主、山中教聖大阿闍梨を戒師として正式に得度を受けました。剃髪出家し、得度名を聖規とつけられました。

それからは、病院行と寺通いにあけくれ師僧の蔵書を借用して不明なところを教えてもらいました。食事の作法や施餓鬼作法などすぐ伝授されて、日々修する事が楽しくなっていきます。



得度式 前列左より二人日本人、その右師僧

この師僧は「天下泰平。世界平和」を願つて、一千座の護摩供を誓い、毎朝四時より修行されていたのです。師、常に曰く「無上の密教の法門も修行しなければ宝のもちぐされで何の役に立とうか。常に三密の修行あつてこそ即身成仏の光が顯れる。聖規、終生忘れるな。」と励まし教えられたのです。

私は師僧の許しを受けて、奥の院の護摩堂の外陣で一週間の断食修行をすることにしました。もちろん主治医には内緒です。これは、自己の業障消除と病氣平癒のためでした。一時体重は三キログラムも減りましたが、その後食欲が出て体重も増え、次第に元気をとりもどしていました。

その後、徵兵検査で第一乙種に合格し、名古屋の連隊に入りましたが、身体検査の結果、不名誉にも即日帰郷となりました。徵用令は入隊時に解除になつたので、師僧の寺に飯米を持ちこみ、療養と修行を兼ねての生活が始まりました。

## 師僧の応召

得度を受けて一年もたたぬ間に、師僧の教聖阿闍梨に赤紙の召集令状が来ました。師曰く「わしは、若い頃肋膜炎をしたことがあるから、お前のように即日帰郷になるかもしれないが、総ておまかせで入隊する。」と。

入隊する朝も、四時より護摩供を一座修行して、大勢の人に見送られて悠々と桑名駅へ向かわれました。私は、日の丸の旗を駅の外がわの角の所に立てかけて、手をふりながら見送ったのです。その時突風が来て、日の丸の旗は地面の石畳にたおれ、旗竿の頂上にある金色にかがやく玉がくだけちりました。私は不吉な予感がして悲しくなりました。

その後、私は護摩堂の内陣に入り、師の武運長久を祈願したのです。内陣の白壁に「壱千座護摩修法中一二五座未修、生々護国・教聖」と墨黒々と書いてありました。これを見た私は「ドキッ」としました。

良い師を得て、これからしっかり密教を学修したいと期待していたのに、真に残念だ。  
ああ、私はこれからどうしたらいいのだろう。：

師の教聖阿闍梨が應召されて後は、奥さんがけなげにも護摩祈願を始められたのです。  
この奥さんは、四国六十一番靈場香園寺の住職、山岡瑞圓僧正が創立された三密學園を卒業し、加行及び伝法灌頂を修行された人でした。数え五歳と二歳の二児を育てながら、毎朝護摩を修し寺を守り、信者を導き助けられる姿に、私は感心しながら掃除等の手伝いをしたのでした。

二回目の應召を受けた私は金沢へ入隊しましたが、又もや胸部疾患の為に即日帰郷を命じられたのです。私は、日本男児として二回も即日帰郷を受ける事を恥ずかしく思い「軍隊に奉公させて下さい。」と申し出たのですが、隊長は「命令は変更出来ぬ。お前は兵士としては役にたたぬが、真言宗の僧侶である。國の為に一心に祈つて奉公するがよい。まつすぐに家に帰れよ。」と慰められたのです。この時、師僧の顔が隊長さんの顔と重なつて見えました。

A black and white portrait of a young man in a military uniform. He is wearing a dark jacket over a light-colored shirt, a dark cap with a single star on the front, and round-rimmed glasses. A white sash with a small emblem is draped over his left shoulder. He is looking directly at the camera with a neutral expression. The background is a soft-focus outdoor setting.



應召入隊記念

## 平和の祈り

大元帥明王に祈願するが一番よいと聞いた私は、未熟者ではありますが、この明王をお迎えして祈願しようと思い、実家の離れ座敷の祭壇の前でお迎えしようと準備致し、心身を清めて夜の十二時過ぎに祈願に入りました。前方便（準備のお経）を終り総ての光を消して大元帥明王を迎請（お迎え）しようと印を結びご真言をとなえますと、真暗やみの中にポツと光が現れました。その光が上に上り出したのです。パチパチと火花を出しながらゆっくり天井まで上り、右の方に少し上下に揺れながら進んで行きます。私は印を結んだままこの異様な光を見つめていますと、壁ぎわ迄行った頃戻り出したのです。私の頭上前を左の方に通りぬけて、左の壁ぎわの辺りまで行ってゆっくりと中央迄もどり、パサッと音を立てて私の前方の畳の上に落ちて来ました。すかさず電気のスイッチを入れて落ちたものを確かめて見ますと、それはなんと香呂鉢の中へ逆にさし置いた太い三本の茶色の線

香でした。拾い上げて正常に香呂に立てて開眼供養が終りました。生まれてはじめて物質が何物かの作用によつて空中を飛んだ体験をした私は、中々興奮がさめません。これを見た人は実姉と他に一名いました。これは何のお知らせだろうか？私の感では火の雨がふると言うことで、空襲があることをお知らせ下さったのだろう。この戦争は日本が敗けるのではなかろうかと話し合つたのです。

## 空襲が始まる

米軍のB29の編隊飛行機が名古屋の上空で焼夷弾や爆弾を投下し始めました。岩倉の実家より名古屋の大火災がよく見えます。名古屋市内の人達はどうしていられるだろうか。家屋財産を焼かれて死傷者も多く出ているに違いないと思うと、何も出来ないのにじっとしてはいられません。名古屋市内に見舞いに行つた人の話を聞くと、一面の焼野原に土蔵

のみが残っています。防空壕に避難した人々は、四方火に囲まれて折り重なって蒸し焼になつて死んでいるとの悲しい知らせに胸がつまりました。

名古屋には何回も空襲があり、空襲警報のサイレンが鳴り響く度毎に安全地帯に避難するのです。

## 戦死の公報

私の兄一人は応召され、弟は志願兵として出征していました。次兄が中支で戦死したと公報が入り、間もなく師僧の教聖阿闍梨が戦地に向う途中、輸送船が魚雷の攻撃を受けて沈没し、海の泡となつた事が桑名の寺より連絡がありました。

米軍の無差別攻撃で、広島や長崎に原子爆弾が投下され、一度に数万人の人が犠牲者となりました。これ以上戦争を続けては、非戦闘員まで大量に殺されてしまします。

昭和廿年八月十五日昭和天皇の玉音放送で無条件降伏した事を知りました。不足や愚痴

を言つた事のない父が『上に立つ政治家が、どれもこれも無智無謀な者はかりだから、このような事になる。大勢の犠牲者は犬死ではないか。』と嘆息しました。召集解除になり、兵隊さんが次々と復員してきます。母は戦死した次兄が公報違いで生還してほしいと願つていったようです。毎日三キロメートルもある岩倉駅までリヤカーをひいて迎えに行くのです。何時間も待つてもむなしく、すごすごと帰つて来る姿を、いたましく思つたのであります。

## 山籠りの誘い

敗戦の後、希望を失つて寝込んでしまつた私の処へ、友人が山中で修行している仙人のような行者を連れて見舞いに来てくれました。其の行者は私の顔を見つめて「お前は修行するように生まれてきた人間だ。修行しなければこのまま死んでしまうぞ。山に来て修行

せよ。美しい空気を充分に吸い、雑念を払い心身の鍛錬すれば必ずよくなる。おれの後についてこい。」と強力に勧めてくれました。私は過去に一週間づつ三回程山に籠った時のですがすがしさを思い出して、山に行く気になりました。

それを聞いた母は驚き「兵隊にも行けないような重病人が、医師も居ない山籠は無謀な計画だ。死に行くようなものだ」と反対しました。その時母に「心配かけてすみませんが、家で医師にかかり、二年間も食養生させてもらいましたが、よくなりません。どうか山の修行を許して下さい。もし裏目に出で死ぬような事があつたら、私の運命と諦めて下さい。」と頼みました。父は「聖規は普通の子とは違うところがある。好きなようにするが良い。」と言つてくれたのです。

仙人のような行者の後に従い、奈良県桜井市の山奥へ向ったのは昭和二十年九月半ばで、稻の穂が出揃い、少し頭を下げかけていました。